

養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究

武井祐子*¹ 寺崎正治*¹ 高尾堅司*¹ 門田昌子*²

1. 緒言

乳幼児を育てる養育者は、程度に差はあれ、様々な育児上の不安を経験する。育児上の不安は、乳幼児健康診査などで把握されることが多い。これを反映して、乳幼児健康診査の目的は、従来の疾病対策から養育者のリスクの早期発見、早期介入による育児不安の解消と育児支援へと移行しつつある¹⁾。

乳幼児健康診査などの相談現場で把握される育児不安を検討した研究では、養育者の7割近くが、子どもが幼児期になると何らかの育児不安を訴えたと指摘されている²⁾。乳児期から幼児期の端境期にある1歳を過ぎた頃は、養育者が子どもの発達や情緒などに懸念を抱き始める時期である³⁾。たとえば、発達の遅れや落ち着きのなさ、くせ、性格のことなど、養育者は子どもの特徴に関わる否定的な側面を訴えるようになって考えられる。実際、乳児期から幼児期の乳幼児健康診査で訴えられた育児上の不安を検討した研究では、月齢が進むにつれ、子どもの発育状態や身体の問題から、発達面やしつけ、性格などの子どもの特徴に関わる内容が増加することが指摘されている⁴⁾。したがって、1歳を過ぎた幼児を育てる養育者においては、子どもの特徴に関わる内容の育児不安が高くなると考えられる。

相談現場で養育者が相談する子どもの特徴の1つに、子どもの生来の行動特徴が挙げられる。これは、いわゆる「気質」と呼ばれるものである。子どもの気質特徴と養育者の育児不安との関連性について検討した先行研究⁵⁾では、“思い通りにならないと激しく感情を表す”“よくさわいで大泣きする”などの“否定的感情反応”で記述される気質特徴は育児不安を高めることが確認されている。また、几帳面さや敏感さ、聞き分けのよさを示す“神経質”や食事、睡眠のリズムが規則的かどうかを示す“規則性”においては、神経質傾向が低いほど、規則的でないほど養育者の育児不安が高くなることが報告されている。しかし、これらの気質特徴の養育者の育児不安への影響力は必ずしも強くなく、子どもの気質特

徴と養育者の育児不安をつなぐメカニズムについてのより詳細な検討の必要性が指摘されている⁵⁾。

そこで、本研究では、現象をよりよく理解することを可能にするとされている質的研究法⁶⁾を採用し、得られた内容により、子どもの気質特徴と育児不安の関係について検討を加える。本研究で明らかにする内容は以下の三点である。第一点として、養育者はどのような子どもの気質特徴に起因して育児不安を感じるのかを明らかにする(以下、目的1)。第二点として、どのような状況で育児不安を感じるのかを明らかにすることにより、子どもの気質特徴がどのような状況と重なると、養育者の育児不安を生起させるのかを知る手がかりを得る(以下、目的2)。第三点として、養育者が育児不安を感じる理由と育児不安を感じる状況を回避する方法を問うことで、育児不安に関する養育者の認知、とくに原因帰属と対処方法を特定する(以下、目的3)。なお、育児不安の定義は、研究者の方法論および母親の個別性のために表現内容が研究者によって一貫していないと指摘されている⁷⁾。よって、本研究では同様の概念として扱われている育児ストレスや育児の悩み⁸⁾など、子どもや育児に対する母親の不安や苛立ちなどを含める。

本研究では、養育者の日頃の育児に対する率直な考えを抽出するため、育児不安の分析で一般的に用いられる質問紙法ではなく面接法を採用した。育児不安の規定因を定量的に分析することにも意義があるが、現象をよりよく理解することを可能にするとされている質的研究法⁶⁾を採用することにより、子どもの気質特徴と養育者の育児不安との関係について詳細に検討することができると考えられる。そこで、本研究では、対象者個別に半構造化インタビューによって検討する。

2. 方法

2.1. 対象者

筆者らが平成17年度から実施している幼児の気質

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 *2 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 臨床心理学専攻
(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-Mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

研究についての調査に参加した1歳を過ぎた幼児をもつ養育者477名を対象とした。対象者全員に対して、本研究の目的について書面で説明した。参加協力の承諾が得られた養育者は76名であった。このうち、本研究では調査および分析を終えた12名(男児6名,女児6名,平均年齢23.9ヵ月)について報告する。養育者はすべて母親であった。

2.2. 調査方法

最初に、対象者に対して調査者がインタビュー内容をICレコーダに録音することに対する許可を得た。そのうえで、半構造化インタビューを進めた。半構造化インタビューでは、まず調査者が対象者に対して、「あなたの子どもの特徴のうち、あなた自身がストレスやつらさ、育児上の不安を感じる特徴はどのような特徴ですか」(目的1)と問いかけた。その問いかけに対する対象者の回答を踏まえたうえで、育児上の不安に結びつく要因に関する聞き取りを進めた。聞き取りの内容は、育児不安を感じる状況について(目的2)、育児不安を感じる理由、育児不安を感じないようにするためにどのようにすればよいか(目的3)の三点であった。所要時間は1人につき1時間程度であった。

2.3. 分析方法

ICレコーダに録音された調査者と対象者の会話のやりとりのうち、育児不安と関連がある子どもの気質特徴(目的1)、どのような状況で育児不安を感じやすいか(目的2)、そのように感じる理由、そのように感じないようにするためにどのようにすればよいか(目的3)についての問いかけに対して、対象者が述べた発言を抽出し、表を作成した。

2. 結果

3.1. 子どもの気質特徴と養育者の育児不安について(目的1)

育児不安を感じる子どもの気質特徴を、「ない」あるいは「すぐに思いつかない」「手がかからない」とした養育者は、12事例中3事例であった(事例3,6,12)(Table 1)。残る9事例は、育児不安を感じる特徴として、「… 気性が激しい」(事例7)、「癩癩がすごい…」(事例10)といった気性の激しさや、「… 髪の毛をひっぱる…」(事例4)といった乱暴さ、「自分の思うように動かそうとする…」(事例1)、「頑固」(事例2)、「… 服を着ない…」(事例5)、「言っても聞かない時とか、物を投げるんですよ…」(事例8)、「買い物行ったら走り回ったりとか、動かないとか」(事例9)といった養育者に反抗的な特徴、「敏感というか…」(事例11)といった過敏な特徴を報告した。

3.2. 養育が育児不安を感じる状況について(目的2)

養育者が挙げた育児不安を感じる状況については、「… もうすごく機嫌が悪くて、… グズグズ言って…」(事例5)や「… 食べる時もあり食べないときもありだから、遊び食べとかししたら、… せっかく作ったみたいなの…」(事例12)というように、子どもの特徴や行動そのものに育児不安を感じるとした事例は12事例中2事例であった。事例5においては、「… ものすごい(子どもの)機嫌が悪くなって…、こっちは気が狂いそうになって…」しまい、その困難な状況を解決するために試みたことによって、「… 余計仕事が増えて」しまうために育児不安を感じるという報告し、事例12では、自分なりに考えて、子どもの特徴に応じて働きかけをするものの、「… 余計に子どもも思ったように動かなくて」、そのことで、「… ちゃんとまわらせていない自分にも腹がたつみたいなの…」と、自身の育児に対する不安を感じていた。

一方、12事例中7事例において、「… 家事をしようとしていてもちょっと立ち上がったらかんたか…」(事例1)、「自分がちょっとしたいことが… 邪魔してきて出来ないときとか」(事例2)、「… しなくちゃいけないことがあるのに、ぐずられる…」(事例3)、「… 出かけるといっても出かせないとか…」(事例6)、「… ちょっと待つてというのを聞いて欲しいのに、聞いてくれない」(事例7)、「… 何時までに寝かせようと思って、それが上手くいかない、と、どンドンイライラしてきて」(事例9)、「自分で考えて…、それにそってやっばしてくれなかったら、ちょっとイライラしたり…」(事例11)というように、子どもの特徴が直接に育児不安を高めるのではなく、子どもの特徴によって養育者が何か予定していたことが出来なくなる状況で、育児不安を感じるという報告されていた。

3.3. 養育者の育児不安に関する認知、原因帰属と対処方法(目的3)

育児不安を感じる理由については、子どもの特徴としてとらえていたのは1事例のみであった(事例1)。12事例中8事例は、「私自身」(事例2)、「それはもう自分中心に考えているから…」(事例3)、「自分の置かれた場所が悪いと思うんですけど…」(事例5)、「今はしんどいから… 普段はできることが…」(事例5)、「(原因は)自分でしょうね…」(事例6)、「自分の精神状態によって違うんですけど…」(事例7)、「私の(状況によるんだ)と思うんですけど…」(事例7)、「自分のせいと…」(事例9)、「自分の都合ですよ…」(事例11)、「わたしが自分を中心に考えているから…」

(事例12)というように、自分の考え方や体調に原因があるとしていた。

一方、12事例中4事例が、「大変な気持ちを同感して欲しいというのがあります…」(事例8)、「…パパのせい」(事例9)、「…(夫に)良い様に良い様に言われてきたけど、実際は違っていた」(事例10)、「…口で言わなくてもわかってくれるだろう…」(事例11)というように、夫の育児への協力や精神的なサポートが得られないために育児不安が高まると報告していた。

さらに、育児不安を感じる状況を回避するために、12事例中3事例が、「寝ている間にすべてが終われば…」(事例1)、「私がそういうことを思ってなかったらならないと思います」(事例3)、「物事に終わられていない状況」(事例12)というように、養育者自身の対処の仕方や考え方を考えることによって、育児不安を感じる状況を回避しようとしていた。また、「連れ出してくれたときに自分の思い通りに事が運ぶのがすごいストレス解消」(事例9)と、子どもに妨げられることなく、自身の思うように状況をコントロールできることがストレス解消になるとしていた事例もみられた。周囲からサポートを得ることについては、「…お父さんがこうちょこっと帰ってきてくれて…」(事例2)と夫からのサポートを得ることをあげた事例もみられたが、12事例中7事例において、「…外出かけんとなって。私の気分を変えようって。近所のおばちゃんたちと話したり…」(事例2)、「…友達がいるのと、ママ友がいると、しゃべったり、関わったりすることで」(事例5)、「友達とかもできるだけ一緒に遊んだりして…」(事例6)、「…よそでストレス発散…、聞いてもらってストレス発散」(事例10)、「友達と遊ぶことかな…」(事例12)と同じ子どもをもつ母親との交流や誰かに話を聞いてもらうこと、「…趣味というか、…海に行くのが趣味で。海に行って潮風にあたって…」(事例7)、「自分の好きなテレビ、ビデオとか…」(事例11)など、何か自身が好きなことに取り組むことによって、育児不安を感じる状況を回避できることがうかがえた。

4. 考察

本研究において、子どもの特徴に対して育児不安を感じたと報告した事例は12事例中9事例であった。報告された子どもの特徴は、癩癩などの気性の激しさや、乱暴さ、反抗的などであった。これらの特徴は、子どもへの対応が難しいと指摘される特徴であり、「思い通りにならないと激しく感情をあらわす」といった、「否定的感情反応」⁵⁾で示される特

徴に対応していると考えられる。

12事例中9事例で子どもの特徴に対して育児不安を感じるという報告をしている一方で、育児不安を感じる状況について尋ねると、子どもの特徴そのものをあげたのは2事例であった。12事例中7事例において、子どもの特徴そのものではなく、子どもの特徴や行動によって、養育者自身の行動が中断したり、予定していた状況を妨げられると、育児不安を感じるという報告していた。興石⁹⁾は、子どもに対する統制不能感が高まると育児不安が高まること、一方で母親が子どもに主導権を与えず自らが場面を統制しようとする様な不適切な育児行動が、母子間に強い葛藤を生じさせ、母親の育児不安を増強させると指摘している。つまり、養育者は子どもの特徴そのものに育児不安を感じるというより、子どもと関わるなかで、子どもの特徴を起因として生じる行動や反応に養育者が対処できなくなると、養育者の行動が中断し、物事が予定通りに進まなくなるため、養育者の育児行動に対する自己効力感が低下し、育児不安が高まるのではないかと考えられる。Figure 1に、これら諸要因の関連を示す。

また、子どもの特徴に育児不安を感じるとした2事例においても、1事例は子どもの特徴に育児不安を感じつつも、その状況を改善するために試みたことがうまくいかなかった時に、また、もう1つの事例においては、子どもに働きかけたことがうまくいかず、適切に対処できなかった時に育児不安が高まっていた。石山¹⁰⁾は、養育者の育児不安は、理想とする対応と実際の対応の不一致と関連があると指摘している。本研究で得られた結果をあわせて考えると、自身の考えや行動を理想とする方向に変えることによって、対処を試みる傾向が強い場合には、理想とする方向に現実の状況が改善されていかないと、より養育者の育児行動に対する自己効力感が低下し、育児不安が強まるのではないかと考えられる。

育児不安を感じる理由については、12事例中8事例が自分の考え方や体調に原因があるとしていた。興石¹¹⁾は、養育者が自己の感情に注目しやすいと対処不能感が高まり、育児不安が高まることを指摘している。本研究で得られたように、養育者が育児不安を抱く理由を自身の考え方や体調と認知し、それに固執することは、育児に対しての対処不能感を高め、結果として、育児行動に対する自己効力感が低下し、養育者の育児不安が高まるのではないかと考えられる(Figure 1)。

また、12事例中6事例において、育児不安を感じる理由を身近な育児への協力者である夫の協力が得られないことや育児の大変さへの共感といった精神

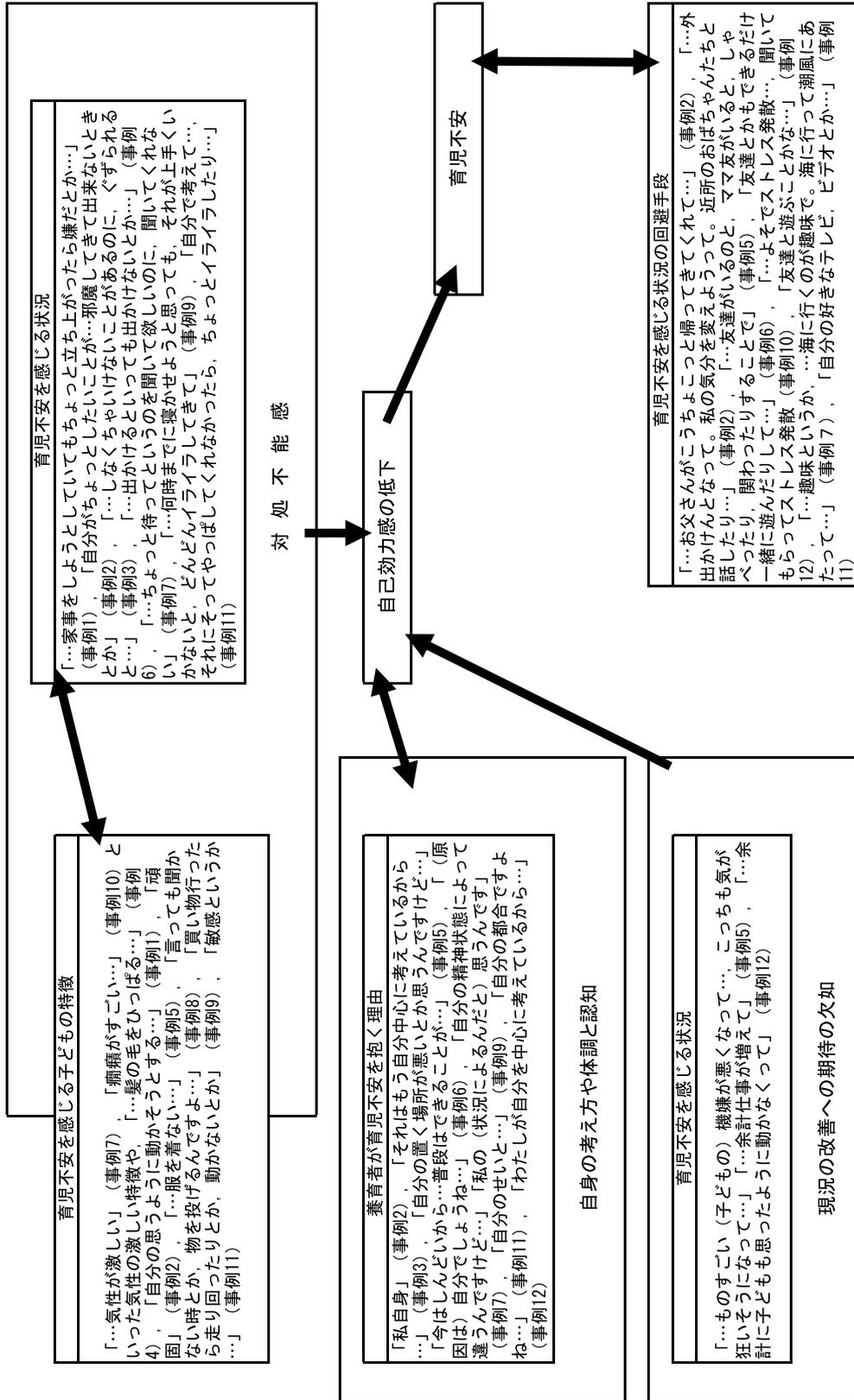


図1 育児不安に関わる諸要因の相互関係

的なサポートが得られないことと報告していた。また、育児不安を感じる状況を回避する方法として、夫からのサポートを得たり、同じ子どもを育てる母親とのつながり、近所の人々のサポート、夫の両親からの援助だけでなく、自身の趣味や好きなことをして過ごすことが、育児不安を低下させるとした事例が8事例みられた。育児不安を低下させる要因として、加藤・小林¹²⁾は家族や社会が養育者をサポートすることと指摘している。本研究において、育児不安が生じる理由を自身の考え方や対処能力とした事例においても、育児不安を回避する方法として、自身の考え方や対処能力を高めるよりも夫や友人からのサポートを得ることと認知している養育者がみられた。つまり、育児不安に対処するために養育者が選択する方法は、必ずしも育児不安が生起する原因として養育者が認知している内容を改善することとは限らないと考えられる。

本研究では、7事例において、子どもの特徴を起因として生じた行動に対して自身が適切に対応できない状況に育児不安を感じ、8事例において、育児不安を感じる理由として、自身の考え方や対処に対しての自信のなさをあげていることが明らかになった。一方、8事例において、夫や友人など周囲からサポートを得ることや何か自身が好きなことに取り組むことによって、育児不安を感じる状況を回避するとしていた。つまり、養育者の育児不安を規定する大きな要因は、子どもの特徴や行動への養育者の対

処能力の不備であり、自身の育児能力への自信のなさが育児不安を高めるが、養育者は育児不安が生起する理由として認知している育児能力への自信のなさなどを解消することで対処するのではなく、自身の趣味や周囲からのサポートを得ることで育児不安を解消していくことが明らかとなった(Figure 1)。櫻谷¹³⁾は、育児場面における支援には、親の育ちを支え、自信の回復につながるような支援が不可欠であると指摘している。本研究では、養育者自身は自分の育児能力の不備や育児能力への自信のなさを訴えながらも、そのこと自体に対処することで育児不安を解消するという事例は3事例であった。しかし、養育者の育児不安を低減していくためには、夫や育児仲間からのサポートも必要な一方で、養育者の対処不能感を低減することによって育児行動に対する自己効力感を高め、養育者が選択した育児行動を認めることも重要と考えられる。乳幼児健康診査などの相談現場で、このような支援を専門家から得られることが、養育者の育児行動に対する自己効力感の低下を防ぎ、育児不安を低下させ、自信をもって育児にのぞむことができるサポートになると考えられる。

研究のために協力して下さった12名の養育者の皆様、逐語録の作成をサポートして頂いた渡邊沙也香氏に謝意を表します。

注

本研究は、筆者らが平成17年度から実施、報告してきた^{4,5)} 幼児の気質研究の一部として実施したものである。また、本研究は、調査及び分析の中間報告として位置づけられる。

文 献

- 1) 松石豊次郎：乳幼児健診の意義とその必要性について。小児保健研究，**61**(2)，247-250，2002。
- 2) 平海光夫：乳幼児健診で見られた育児不安の検討。生活科学論叢，**37**，31-37，2006。
- 3) 吉永陽一郎：育児不安と虐待。小児科診療，**70**(3)，487-492，2007。
- 4) 武井祐子，寺崎正治，御牧信義：幼児期の気質特徴と乳児期までの発達的問題の有無との関連。保健の科学，**48**(8)，625-629，2006。
- 5) 武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌，**16**(2)，221-227，2007。
- 6) 下山晴彦監修 McLeod J 著 谷口明子・原田杏子訳 臨床実践のための質的研究法入門 金剛出版，東京，2007。
- 7) 恵良恵子：育児不安の概念定義の再検討。日本女子大学人間社会研究科紀要，**4**，61-70，1994。
- 8) 渡辺弥生，石井睦子：母親の育児不安に影響を及ぼす要因について。法政大学文学部紀要，**51**，35-46，2005。
- 9) 輿石薫：育児不安の発生機序。日本小児科学会雑誌，**109**(3)，337-345，2005。
- 10) 石山あづ美：母親の幼児への対応における理想と実際の相違およびその育児不安との関連。山梨学院短期大学研究紀要，**25**，109-114，2004。

- 11) 輿石薫：母親の自己注目傾向と育児不安について．小児保健研究，**61**(3)，475-481，2002．
- 12) 加藤恵子，小林真：母親の育児不安とソーシャルサポート．富山大学教育実践総合センター紀要，**2**，45-50，2001．
- 13) 櫻谷真理子：今日の子育て不安・子育て支援を考える～乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて～．立命館人間科学研究，**7**，75-86，2004．

(平成20年5月31日受理)

A Qualitative Interview Study of Mothers' Anxiety About Childcare

Yuko TAKEI, Masaharu TERASAKI, Kenji TAKAO and Masako KADOTA

(Accepted May 31, 2008)

Key words : qualitative study, mothers' anxiety, childcare, interviews

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.18, No.1, 2008 219-225)